みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

海岸狩猟漁撈民の社会組織：トナカイ遊牧民との比較において

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5531

SOCIAL ORGANIZATIONS OF THE HUNTER-FISHERS ON THE SIBERIAN COAST

Shiro Sasaki
National Museum of Ethnology
Osaka

海岸狩猟漁撈民の社会組織
——トナカイ遊牧民との比較において——

佐々木　史　郎
(国立民族学博物館)

〈概観〉

本報告で扱う事例は、共通の言話、共通の文化伝統を持ちながら、居住環境と生業形態の違いにより、互いに全く異なる社会組織と社会規範を持つようになった民族の場合である。具体的にはチュクチ族とコリヤーク族の事例を取り上げる。この両民族はシベリアの最も東のはずれにあたるチュコト半島からカムチャッカ半島にかけての地域に居住し、1979年の統計では人口はそれぞれ14000人と7900人である。彼らは現在は大きくツンドラのトナカイ遊牧民と海岸地帯の海獣狩猟民とに大別されている。しかし、文献から知られる限りでは、少なくても17世紀まではチュクチにおいては、その大部分が野生トナカイ狩猟民であり、一部の海岸地帯の者が海獣狩猟にも従事しているという状態であり、コリヤークでは海岸狩猟民の方が内陸狩猟民より数の上で上回っていた。

彼らの居住地はシベリアの最も東のはずれに位置していたため、ロシアの支配下に入るのが最も遅れた。コリヤークは伝統的に敵対関係にあったチュクチとの対抗上比較的早くロシア人の支配に服したが、チュクチ族は最後まで激しく抵抗し、ロシアのチュコト半島の経営をめぐって双方に多大の犠牲を出している。

両者のロシアへの対応の仕方はそれぞれであったが、その影響はシベリアの他の地域の場合と同じであった。それはロシアの商業経済に巻き込まれるということで、より具体的にいえば、毛皮税（ヤサーク）と毛皮交易によってその経済的基盤を変えられてしまったのである。すなわち、従来野生のトナカイを狩猟することで食糧、毛皮を始め、生活に必要な物資を得ていたのだが、毛皮を求めて入ってきたロシアの商人達がテン、キツネ、リス、ラッコなどの毛皮と交換に、鉄、茶、タバコ、酒、パンなどをもたらし、彼らの物質文化を変えたために、かつては必要に応じて行なっていた毛皮獣狩猟の方が主生業のようになってしまった。しかし、彼らの生活に必要な最小限の需要を満たすことで成り立っていた需給のバランスは、商業的狩猟の開始とともに崩れてしまい、資源の枯渇のために従来の狩猟を主体とする生活形態を変更せざるをえなくなってしまったのである。

彼らはもともと輸送用にトナカイを飼うことは知っていたが、それを食用に殺すことは稀であり、まして自分らが飼うトナカイの肉を主食とする生活をするには飼育頭数が少なすぎた。恐らく17世紀までの家族当たりの飼育頭数はチュクチでもコリヤークでも100頭を越えることは稀であっただろう。しかし、毛皮資源の減少とともに動物を自らの手でふやす必要が生まれ、トナカイ飼育の重要性が増大したのである。しかもかつて彼らの生活を支えていた野生のトナカイは捕り過ぎや飼育トナカイとの生存競争に敗れた結果、18世紀、19世紀を通じてその数を急速に減らしていった。また、巨大な野生トナカイの大群を自分のものとして捕り込んでしまった場合もあろうし、他人の家畜を略奪して群を大きくしたものもいたであろう。いずれにせよ最後には自分の持つトナカイに全面的に頼らざるを得ない状態になり、トナカイ遊牧民へと転換した。

しかし、その時チュクチ族、コリヤーク族の全員がそれに成功したわけではないことは勿論である。それに失敗した者はまだ資源が十分残っていた海岸地帯へと進出して古くから海岸に住んでいた者と合流し、もともとの海獣狩猟民だったエスキモーの技術を借用して海岸に定着した。元来、チュクチにもコリヤークにも内陸民と海岸民との区別はあったが、その相違は互いに同じような狩猟民として現在程は大きくなかったと思われる。しかし、18世紀以来の社会変動により、チュクチ族とコリヤーク族は内陸のトナカイ遊牧民と海岸の定着的狩猟漁撈

民と大きく2極分化してしまったといえよう。ただ、海岸の資源に恵まれたカムチャッカのコリヤークの方が定住民になる傾向が強く、それに対し、チュクチではトナカイ飼育民になろうとする傾向が強かったようである。

分化した後、彼らの間では、その物質文化、精神文化、社会構造などの中の生業活動に直接かかわる部分が互いに大きく異なっていった。

チュクチ、コリヤークにはそれぞれ独自の文化的な基礎があり、生業の何如にかかわらず共通な文化要素というものがある。しかし、基礎が同じでもそれを生活の中で実際にどのように運用するか、どれを強調するかはそれぞれの置かれた条件による。つまり、トナカイ・チュクチ、海岸チュクチ、トナカイ・コリヤーク、海岸コリヤークの4者（微視的に見ればもっと細分できるが）の間では、文化の基層部ではチュクチとコリヤークという区分ではっきりと分かれるが、その実際の運用面ではトナカイ遊牧民と海岸狩猟民という区分が成り立つのである。本報告では基層部分と運用面の違いがことさら明確である社会構造に焦点を絞って考察する。

ちなみに、生業活動が集団化される以前の時代(つまり、19世紀末～20世紀初頭の有名なボゴラスとヨヘリソンが活躍していた時代）のチュクチの人口は全部で12000人ほどで、トナカイ遊牧民と海岸定住民との人口比は3：1であり、コリヤークは7500人ほどで、比率は1：1であったという。

〈海岸定着民の社会組織〉

海岸定着民の社会の特徴を整理すると以下のようになろう。

1）家族形態：普通は1組の夫婦とその未婚の子供からなる。一夫多妻もある。

2）住居形態：冬は竪穴式住居に数家族で集住。夏は家族ごとにテントを張る。但し、ボゴラスの調査当時（20世紀初頭）には既に竪穴式の住居は使われず、トナカイ遊牧民と同じように冬でも各家族ごとにテントを使用していた。一家屋当りの平均的な人数は6.5人である（ボゴラスによる)。

3）村落形態：村の構成員、首長、家の配列、永続性については以下の通りである。

①構成員；地縁的に結合した家族からなる。無論親族的繋がりを持つ家族もいるが、それが村落構成の原理ではない。

②首長；a ttoora' lin（首長家の人）またはa rmaci - ra' lin（最も強い家の人）と呼ばれる。多くはその村に代々長く住みついている家族の長がなる。その家は普通、村の前面（後述）に位置する。彼は土地の神との関係において他の者よりも優越しているといわれ、貢ぎ物を受けることもある。このような首長がいない村もあるが、そこでは村の住民の地位は平等である。

③家の配列；普通、あらゆる家屋が入口を海に向けて一列に並び、その最も右端（つまり村の前面と考えられている）に首長の家が来る。首長のいない村では配列が不規則になることもある。

④永続性；一般的にチュクチやコリヤークの海岸定着民の村落構成員は同じような形態を持つ隣族のエキスモーに比べて変動しやすいといわれる。特にチュクチは興奮しやすい性格を持つため、男達は不猟が続いたり、気にいらないことがあると、一人で他の村に飛び出し、時には良い猟場を求めて転々と村を移り歩くものもいたといわれる。また、狩猟で貯えた財産を元手にトナカイを買い、トナカイ遊牧民として内陸部に去ってしまう場合もあった。このようなことが長く留っている者の村での地位を高めているとも思われる。

4）ボート組：a ttwa't - yirin(boatfull)と呼ばれる。彼らの日常の生業活動にとって最も重要な組織がこのボート組である。その構成員、首長、機能などについては以下の通りである。

①構成員；かつて皮舟を使用していた当時は1ボートにつき8人が普通であった。1人が舵取りでもう1人が銛打ち、そして残りが漕ぎ手である。そして、舵取りが普通船長でもあった。20世紀初頭にはアメリカ式の捕鯨ボートが普及し、漕ぎ手が少なくてすむようになったため1つのボートに乗る人数が5～6人になった。組の構成員はボートの持ち主（船長）の最も近い親族であり、時にはfamily co - operative groupになることもある。しかし家族、親族だけでは人数が足りない時には同じ村に住む友人の家族のものが加わる。ボート組の構成員は比較的固定的であるが、季節ごとに転々と移ってもよい。

②首長；ボート組の首長は船長であり、また、ボートの所有者（a ttwe - e' rmecin）でもある。皮舟使用時代にはボートを作った者が首長になった。捕鯨用ボートを使う時代にはそれを購入したものがなる。他人から借りたボートで組を作って狩をしてもよい。そして、借り賃を支払う必要もない。というのはそのよ

うな支払いは狩の運を手放すことになるからである。ただし、豊猟の後はそのボートを買わなくてはならないという。

③機能；彼らの日常の狩猟活動の単位であり、毛皮や鯨商人との取り引きの際にも協同して対処する。

5）獲物の分配：分配の対象となる狩猟動物はトナカイ遊牧民よりも多種多様である。海獣狩猟で捕れた獲物は、その価値によって異なる。

①小アザラシ；仕止めた者が受け取る。ただし、ボート組の首長は自分で捕らなくても1頭か2頭受け取ることができる。

②アザラシ、セイウチ；頭部は牙といっしょに首長が取る(頭は儀礼に使用される)。牙は首長の兄弟、イトコで組に参加したものの間で分けられる。他の組員にはアゴヒゲから下の脂肪が分けられる。皮は首長、船首にいた者（すなわち銛打ち)、そして漕ぎ手の順に取っていく。

③クジラ；これは村人全員のものであり、肉や脂肪は欲しい人は誰でも取れる。しかし、顎の骨はそのクジラの最初の発見者がもらう。他の骨は狩に参加した者全員で分配するが、首長、銛打ちの順に優先権がある。海岸に打ち上げられたクジラの骨は最初に発見したものが取り、肉と脂肪は誰が持っていってもよい。シロクマの毛皮もクジラの骨と同じ。

④冬の狩猟；基本的には個人的な活動なので獲物は狩人のものであるが、その場に居合わせた者や目撃したものは分配に預かれる。ただし、そこで先頭を目指して競争があり、早く着いたものほど恩恵に預かれる（これはトナカイ遊牧民も同じ)。

6）放浪者：海岸定着民は本来動かすことのできない村に居住しているにもかかわらずトナカイ遊牧民に劣らず放浪して歩く者が多い。幸運を求めたり、交易に出かけるためである。また、トナカイ飼育民とは違って、何も目的もなく旅に出るものに対しても寛大である。旅人に対する接待も暖かい。しかし、寄食者に対しては横柄である。

〈トナカイ遊牧民の社会組織〉

トナカイ遊牧民の社会の特徴を整理すると以下のようになろう。

1）家族形態：普通は1組の夫婦とその未婚の子供からなる。一夫多妻もある。

2）キャンプ形態：キャンプ構成員、首長、テントの配列、永続性については以下の通りである。

①構成員；兄弟、イトコなどの父系の血縁関係がある2～3の家族からなる（それ以上多くの家族が集まるのは稀である)。裕福な者の場合は親族関係のない牧夫の家族が加わることもある。また、貧しいものは親族関係にかかわらず、仲間どうしでキャンプを作ることが多い。交易場にできるキャンプでは親族関係の有無にかかわらず、10家族ほどが集合することがある。トナカイ・チュクチのキャンプには一般にその住民の許可がなければ、新参者が勝手に加わることはできない。それは交易場でも同じである。そのキャンプにテントを張ることを許された者は家畜をキャンプの群に合流させねばならない（一キャンプ一群の原則あり)。

②首長；キャンプの指導者、首長は aunra' lin（首長家の者)、e' rmechin（最も強い者)、aettoora' lin（フロント・ハウスの者）などと呼ばれる。首長の地位は父系、長子優先で継承される。したがって、年が若くても、世代的に下でも長子の長子の方に優先権がある。

③テントの配列；基本的には日が昇る方向を先頭にして一列に並べる。最も北東の端が列の先頭になり、そこに首長のテントが建つ。首長のテントに近いほどキャンプ内での地位は高い。テントの後ろ側にはその家の儀礼の場が設けられるが、家の入口を前のテントのその場所に向けないのが礼儀とされる。貧しい者で構成されるキャンプではその中でもより裕福で力のあるものが先頭に来る。ただし、地形によってはこの通りにならないこともある。交易キャンプなどの臨時のキャンプでは先に来たものほど列の先頭に近い所にテントを張る権利がある。

④機能；トナカイ遊牧民のキャンプは、遊牧集団でもあり、構成員の全家畜を一つの群にまとめて協同で管理する（一キャンプ一群の原則)。

⑤キャンプの永続性；特にチュクチの場合はけんか早いため、キャンプは分解しやすいといわれる。

3）牧夫：家畜を多数持つ裕福なトナカイ飼育民は、家畜を管理するための人手を少しでも多く欲しいことから、

優秀な牧夫は優遇される。トナカイ飼育民の間では目的のないただの放浪者はさげすまされるが、雇い主を探している牧夫は歓迎される。雇傭者と被雇傭者との関係は対等であるのが理想的とされる。牧夫が勤勉で有能な限り、それは可能で、時には雇い主の死後、家族をさし置いて群やキャンプの指揮を取ることもある。

4）分配：家畜の屠殺の際の分配では、まず、首長の家のものが最も良い部分を受け取り、残りを他のキャンプ構成員で分け合う。雇われ牧夫も構成員と同様であるが、働きに応じて雇い主から特別良いところをもらえることもあれば、その逆もある。毛皮の分配も同様である。基本的に、雇われ牧夫が雇傭者からもらえるのは日々の糧と年ごとにもらえる雌の仔鹿である。

〈考察〉

以上の海岸定着狩猟民とトナカイ遊牧民の村落またはキャンプ組織と社会規範の比較を行なってきたが、それにより、以下のような考察が可能になる。

まず家畜という日々の糧であるとともに、財産ともなりうるものの有無が両者の社会組織の根本的相違を生み出していることは間違いない。トナカイ飼育は一方的に自然から収奪するだけの狩猟や漁撈とは違い、一種の生産活動であり、それによって生活が安定したことは事実である。しかし、飼育民達はトナカイに依存して生きているとともに、それに振り回されているのも事実である。というのは、彼らは群の動きに応じて移動して歩かねばならないほかに、常に財産（つまり家畜）の管理、相続の問題につきまとわれている。彼らのキャンプが親族、特に父系の血族を中心に構成されているのは父親の群を子供達が受け継いで管理してるためだけではなく、蜜に群がる蟻のように、その家畜の持ち主と血縁、婚姻など何らかの関係があり、屠殺時の分配や相続などの恩恵に預かろうとするものが家畜の群に群がっているためとも考えられる。母系よりも父系が重視されるのは、群の管理が男の仕事であり、男子の方が多くの家畜を相続するためと、キャンプの防衛上の問題があるためと考えられる。

同じような現象は地理的に全く接触するはずのない西シベリアのトナカイ遊牧民ネネツにおいても確かめられている。彼らの氏族構成を17世紀から今世紀初頭まで追跡していくと、トナカイ飼育が発展し、大規模な飼育が開始されるとともに、氏族はより小さな父系の単系出自集団に分解していく様子を知ることができるのである。ネネツの場合は元来、社会組織が父系出自集団によって構成されるのを原則としており、親族称呼もそれを暗示する形式を持っている。しかし、チュクチやコリヤークでは本来そうではない。親族称呼では父方母方の区別はない。にもかかわらず、トナカイ飼育民に父系の出自が実際極端に重視されているのは、家畜という巨大な財産が彼らの社会の中心に居座っているためであるといえる。

したがって、特定の系列の親族を呼び集めるもののない（いいかえれば特定の単系集団によって守らねばならないようなものがない）海岸狩猟民の社会では、血縁、婚姻による紐帯も父方、母方どちらでもよく、時にはそのような関係が全くないものでも村に受け入れることができるのである。また、トナカイ飼育民は常に移動を繰り返しているからキャンプの離合集散もしばしばあり、不測の事態にも柔軟に対処できるが、海岸定着民の場合は村が固定されている。しかし、他方では、海獣狩猟を基盤とした生活はトナカイ飼育を基盤とするものに比べて不安定であり、臨機往変に対処していかねばならない場面が多い。そのようなところではどこからも人手や援助が得られ、また、どこへでも人が出ていける余地を残しておかないと、村全体が共倒れになる恐れもある。海岸定住民の人々に転々と居所を換える人が以外と多いのはそのためであるといえる。ボゴラスはエスキモーの村の方が安定していると言っているが、これは狩猟技術と装備の点でエスキモーの方が海岸チュクチよりも優れており、不測の事態になるケースが少ないためであろう。

トナカイ遊牧と海獣狩猟とどちらが有利な生業であるかはその土地の諸条件やその方法、価値観などによるため、一概には言えない。チュクチの人口比とコリヤークのそれとを比較すると、カムチャッカの海岸、河川の方が資源が豊かで海獣狩猟と漁撈を主体とする生活には有利なようである。恐らくチュコト半島では良い場所を先に海岸に定着したエスキモーに占められ、チュクチの場所は少なかったのであろう。彼らにはどちらかといえば、トナカイを得て内陸に入ろうとする傾向があり、20世紀初頭でもトナカイ飼育民の人口が増加しているのに対し、海岸狩猟民は減っているのである。しかし、必ずしも内陸のトナカイ遊牧の方が生活に恵まれているとは言えない。というのは、コリヤークの男女の人口比を見た場合、海岸民では男子比が100：102.6で女性の方が多い

のに対し、トナカイ遊牧民では100：90.8と女性がきわめて少ないのである。同様のことは先に述べたネネツでもいえる。その理由としてヨヘリソンはトナカイ飼育民の女性の労働量の多さと厳しさがあるとしているが、それだけではなく、その社会的地位や物質文化の問題も関係していよう。例えば、海岸狩猟民の方が不猟時には苦しいが、平素は食べ物の種類が豊富で、決してトナカイ飼育民よりも見劣りするような生活はしていないのである。それどころか、トナカイ飼育民のもとでは連日トナカイの肉しか食べられず、海岸部の人々はそれに対して不平を鳴らすこともあるのである。

したがって、カムチャッカ半島のように恵まれた所では必ずしもトナカイ飼育民に転ずる必要はなく、逆にトナカイを捨てて、また失って、海岸部に出て来るものも多いのである。最初に概観の所で述べたチュクチ族とコリヤーク族のトナカイ飼育民と海岸狩猟民との人口比の違いはこうしたことに由来するのである。

本報告で扱ったのはあくまでも社会原理の実際の運用面での問題であり、海岸地帯に進出してそこでの生活に適応した人々の場合を、同じ文化伝統を持ちながらもトナカイ遊牧という全く異なる生活をしている人々と対照させることによって、その特徴を明確にしようとしたものである。今回は概論であるが、将来もっと精密な議論に発展させていきたい。